

ことばの科学研究センター活動報告

吉田和彦*
 梶茂樹***
 加野まきみ**
 北上光志*
 鈴木孝明*
 島憲男*
 森博達****

要 旨

ことばが内包する世界は奥深い。総合学術研究所ことばの科学研究センターの目的は、日本語を含む世界の諸言語を共時的・通時的に研究し、21世紀におけることば学の新たな可能性を追求することにある。本報告では、令和3年度における本センターの研究成果について概説する。

キーワード：記述言語学，比較言語学，統語論，テキスト言語学，心理言語学，コーパス，文化交渉史

1. ことばの科学研究センターの概要

ことばの科学研究センターは、令和2年4月1日に総合学術研究所に設置された。本研究センターの目的は、本学の言語・文学の研究者を結集し、また学外の研究者の協力を得て、日本語を含む世界の言語と文学に係る諸問題を研究し、21世紀におけることば学の新たな可能性を追求すると同時に、言語と文学に係る多元的な研究を展開することにある。世界には文字のある言語と文字のない言語がある。言語に文字があれば、通常その言語で書かれた文献がある。しかし文字のない言語には文献がない（ただ他言語話者がその文字で何らかを書き留めることはある）。言語の通時的研究は、過去の文献を持つ言語では行いやすいが、文字がなく文献のない言語でも可能である。それは、現時点での共時的記述を行い、記述対象言語の比較研究により言語の歴史を再構成することができるからである。世界には文字のない言語が多く、むしろこういったやり方を取らざるをえない場合が多い。通時的研究としては、文献のある印欧比較言語学や漢語の歴史的研究などが進んでいるが、その経験と、

* 京都産業大学外国語学部

** 京都産業大学文化学部

*** 京都産業大学現代社会学部

**** 京都産業大学名誉教授

文字がなく文献のない言語の通時的研究との共通性と相違点を認識し、両者を合わせた総合的研究が必要である。こういった研究はまだ行われていない。

同時に、言語の共時的記述が研究のベースとなるため、個別言語の語彙、文法、テキストの地道で緻密な研究が必要となる。さらに、研究において重要な役割を果たすテキスト理解のために、文学、歴史学などとの協同も必要である。また、ヒトの言語産出と理解、およびこれらの獲得に関する仕組みの理解のもとに研究を行うことは、本研究プロジェクトの大きな特徴である。世界には、印欧語族、シナ・チベット語族、オーストロネシア語族、ニジェール・コンゴ語族など幾つもの語族 (language family あるいは phylum) が存在し、言語としての一般的な共通性を保ちつつも、類型論的構造や歴史が異なる。従って、まず共同研究では、それぞれの研究者が取り組んでいる言語の構造的特徴を対照言語学的に明らかにし、その研究法を開示する。そして、それが他言語の研究にどういう意味を持つかを考察し、その研究法の新たな発展の可能性を探る。さらに、様々な系統的に異なる、あるいは系統的には同じではあっても構造の異なる言語の研究において、その共時的研究のみならず通時的研究においても、研究方法がどう共通してどう異なるかを明らかにする。また、様々な研究におけるテキストの価値、有効性なども明らかにする。

2. 研究体制

本センターは、京都産業大学外国語学部、文化学部、現代社会学部に所属する教員を学内メンバーとし、また学外メンバーとして京都産業大学名誉教授（元外国語学部教授）を加えている。それぞれの所属や専門、本センターにおいて果たす役割は以下の通りである。

吉田和彦（外国語学部客員教授）

印欧比較言語学

梶 茂樹（現代社会学部非常勤講師）

記述言語学、アフリカ諸語研究学

加野まきみ（文化学部教授）

コーパスを活用した英語学研究

北上光志（外国語学部教授）

テキスト言語学の観点からのロシア語アспект研究

鈴木孝明（外国語学部教授）

心理言語学研究

島 憲男（外国語学部教授）

ドイツ語構文とテキストの研究

森 博達（名誉教授）

中国語学・日本語学・朝鮮語学、東アジア語文交渉史の研究

3. 本年度の研究会

本年度は4月28日にことばの科学研究センター会議を開催し、本年度の活動方針を決定した。その方針にしたがって、7回の研究会を開催した。以下その研究発表の要旨を報告する。

令和3年度第1回研究会

日時：令和3年6月23日（水）15:30～17:00

場所：第二研究室棟会議室および Teams によるオンライン開催

発表者及びテーマ：梶茂樹「アフリカ人の名前」

世界には言語は多いが、その多くは無文字言語である。語彙と文法の調査のあとテキスト分析も必要となるが、文学はあっても文字に書かれることはないので、調査者自身が文字化していく必要がある。今回は短いテキストの代表として人の名前の考察を行う。例は、コンゴのテンボ族、ウガンダのニョロ族など私が現地で調査してきたアフリカ諸族のものを用いる。そこでは無文字社会がいかに関文文字の問題に対処しているか、その一端を見ることができる。

人の個人名はその人を他の人から区別することを第一の目的とするが、同時に、その子供が生まれた時の家族や社会の状況を記録する媒体としても働く。テンボ族やニョロ族などアフリカの多くの地域では、子供が生まれた時点での親の最大の関心事がその子供の名前となって表れてくる。例えば、戦争が起って大変だという場合は、戦争といった名前が子供につく。また近所に自分をねたんでいる人がいれば、ねたまないで欲しいというメッセージをその人に発するが、これを子供の名前の中に刻んでおく。こういったメッセージの交換は、夫婦間、親子間、兄弟間、隣人間など様々な人間関係に基づいて行われる。それはあたかもお互い手紙を書いているかのようである。名前はメッセージであり、それは様々な人間関係という観点から分析できるというのが私の結論である。

令和3年度第2回研究会

日時：令和3年7月28日（水）15:00～17:00

場所：第二研究室棟会議室および Teams によるオンライン開催

発表者及びテーマ：加野まきみ「海を渡った日本語－コーパスで探ることばの変化－」

私は、コーパスと呼ばれる大規模な言語データベースを使って、主に英語の語法・意味などを観察するという手法の研究を行っています。特に、借用語や新造語が英語の中でどのような変化を経て英語の語彙として定着していくのかに大変興味を持っています。今回は、長年調査を続けている日本語から英語に入った借用語の変化の過程についてお話ししたいと思います。

英語から日本語に入った「外来語」の数が膨大であることは、カタカナで表記する語の多さから容易に推測できますが、逆に日本語から英語に入って実際に使用される語はどれくらいあるのでしょうか？日本独特の伝統・文化を表す kimono, geisha, samurai, 飲食の分野の sushi, tempura, sake, 武道の分野の judo, karate など英語話者が認識する語彙は数多くありますが、近年ではビジネスやテクノ

ロジー、またアニメの影響を受けた語もあり、英語辞書出版社の Word of the Year (いわゆる「流行語大賞」のようなもの) に選ばれることもあるほどです。

新しく英語に導入された語は、発音・綴りの変化、連語の形成、接頭辞や接尾辞の付与、品詞転換、比喩用法や意味変化などを経て、新しい意味や語法を獲得し、英語として生産性を持った語彙として受け入れられて行きます。日本語から英語に入った借用語がどのような変化の過程を経て英語の語彙として定着していくのかを、コーパスから抽出した最新の用例などを交えて論じたいと思います。

令和3年度第3回研究会

日時：令和3年9月29日(水) 15:00～17:30

場所：第二研究室棟会議室および Teams によるオンライン開催

発表者及びテーマ：森博達「『日本書紀』区分論と聖徳太子」

今年は聖徳太子薨去 1400 年の大遠忌に当たる。太子の事績は『日本書紀』(720 年撰) に多く載せられている。今回の発表では、『日本書紀』区分論の視点から太子の事績の虚実に迫るとともに、推古朝の特質に言及したい。【参照】[聖徳太子シンポジウム—聖徳太子信仰と伝承—\(パネルディスカッション\) - YouTube](#)

- ・『日本書紀』30 巻は漢文で書かれているが、表記の性格によって、 α 群・ β 群・巻 30 に三分される。 α 群は漢字の中国音で正格漢文によって綴られ、 β 群は漢字の日本音により和化漢文で書かれている。また編修の最終段階で、 α 群を中心に潤色や加筆が行われた。

- ・聖徳太子の初出記事は、 α 群巻 21「崇峻紀」の蘇我物部戦争であるが、書紀区分論から見て編修の最終段階で書き加えられたものと推測される。

- ・ β 群巻 22「推古紀」の「憲法十七条」は倭習満載で、その倭習は β 群の倭習と共通する。飛鳥時代に原形があり、「推古紀」の述作者が潤色・修文したものと考えている。

- ・推古朝の統治は仏教が背景にあり、菩薩天子たる梁の武帝や昭明太子がロールモデルとなった。仏教文化は梁⇒百濟⇒飛鳥というルートで導入された。推古朝では天文観測が行われ、史書の編纂にも着手した。太子は蘇我馬子と協力して天皇を補佐し、隋や高句麗に劣らない独立国家の建設を目指した。

令和3年度第4回研究会

日時：令和3年10月20日(水) 15:00～17:00

場所：第二研究室棟会議室および Teams によるオンライン開催

発表者及びテーマ：北上光志「テキスト言語学の観点からのロシア語動詞と副動詞のアスペクトに関する通時的研究～19世紀から20世紀の文学作品を資料として～」

従来のアスペクトに関するテキスト研究は単語の意味に基づく分析方法が中心であり、あいまいな点が多い。本発表では客観的に形に現れた分析基準を提案して、ロシア語で書かれた19世紀から20

世紀の文学作品で用いられている動詞と副動詞を分析し、アスペクトの使い分けが時代とともにどのように変化してきたかを明らかにする。

小説の中で発話文が出てくるところは物語の山場になる頻度が高く、また言語学的に「前景 (foreground)」の要因を多く持つ (Kitajo (2015 他))。このことに関連し、本発表は「発話文からの距離」を基準にして、動詞と副動詞のアスペクト (完了体, 不完了体) 分布が、前景とどのような位置関係になっているかを分析する。発話文からの距離を3つ (a) 直接話法構文, b) 直接話法構文の直前直後文, c) 直接話法構文から2文以上離れた文) に分け, a) と b) が「前景に近い位置」, c) が「前景から遠い位置」と規定する。この3区分で用いられている動詞と副動詞の使用頻度をアスペクトの違い (完了体, 不完了体) を考慮しながらカウントすることにより, 200年間に書かれた小説をぶれることなく分析することができる。

分析資料は, 19世紀から20世紀を50年ごとに4区分し, 時代を代表する16人の作家の作品で使用されたすべての動詞と副動詞を分析する。分析した動詞は総数34503例 (完了体: 19179例, 不完了体: 15324例), 副動詞は総数6870例 (完了体: 2640例, 不完了体: 4230例) である。分析した結果をもとに, これまで明らかにされていなかったテキスト機能面でのアスペクトの歴史的変動の全貌を時代背景も踏まえてダイナミックに解明する。

令和3年度第5回研究会

日時: 令和3年11月24日 (水) 15:00 ~ 17:00

場所: 第二研究室棟会議室および Teams によるオンライン開催

発表者及びテーマ: 島憲男「構文の機能的役割: 宮沢賢治のドイツ語訳テキストを手掛かりに」

今回の発表では, これまで発表者が関心を持ってきたドイツ語構文のいくつかを取り上げ, 当該構文がテキストの中でどの程度実際に使用され, どのような役割・効果を担っているかを調査した結果を報告する。

発表者は, これまで主にドイツ語を原典とするテキストを使ってドイツ語の構文分析を進めてきたが, 今回は日本語からドイツ語に翻訳された宮沢賢治の複数の作品を用いて, これまでの研究成果が単に検証されただけでなく, 新たな展開の可能性が提供されたことを示したい。さらに可能であれば, 発表者が現在取り組んでいる「構文間の文法的ネットワーク」の中でそれぞれの構文をどのように位置付けることができるのか, その方向性も合わせて提示したいと考えている。

なお, 取り上げる構文は, ①結果構文 (事態を引き起こす基底動詞と結果状態を表す結果句の相互作用によって名詞句の最終結果状態を確定させる構文), ②同族目的語構文 (自動詞を基底動詞としつつも文中に同語源である対格名詞が生起する構文), ③オノマトペ (擬音・擬態表現) を有する表現を予定している。

令和3年度第6回研究会

日時：令和3年12月22日（水）15:00～17:00

場所：第二研究室棟会議室および Teams によるオンライン開催

発表者及びテーマ：鈴木孝明「束縛現象に関する言語知識とその習得プロセスー日本語を母語とする初級英語学習者の場合ー」

第二言語習得における照応を「生得的な言語知識」と「帰納的な学習」という2つの側面から探る。英語における再帰代名詞と代名詞は基本的に相補分布を成す (e.g., Billi hates himself_i/*_j/him_i/*_j)。

原理とパラメータのアプローチでは生得的な言語知識 (e.g., 束縛原理) と経験の相互作用によりこのような現象に関する言語知識が有効になると仮定されているが、学習者が自ら法則性を見出し、一般化を行う帰納的な学習 (e.g., プリエンプション) による習得も可能かもしれない。本研究では158名の初級英語学習者を対象に文法性判断課題を行い、単文における1人称の再帰代名詞と代名詞の文法知識を探った。

その結果、再帰代名詞よりも代名詞に誤りが多く、特に非文法的に使われた代名詞を誤って文法的だと判断する傾向が高いことがわかった。母語獲得研究で頻繁に観察されるこの誤りは、語用論的な問題 (原理P) だとする提案があるが、1人称の代名詞を使うことでこの要因を排除しようと試みた本研究においても観察されたことから、(少なくとも) 本研究の学習者に関しては別の要因がかかわっていると考えられる。詳細な個人データ分析を行うことで、転移の影響を分析し、さらに、束縛原理に従わない短距離代名詞を調査に加えることで、束縛現象の習得プロセスに関する考察を行う。

令和3年度第7回研究会

日時：令和4年1月19日（水）16:00～18:00

場所：第二研究室棟会議室および Teams によるオンライン開催

発表者及びテーマ：吉田和彦「印欧祖語に再建される基本語順およびゲルマン語に生じた語順変化」

ユーラシア大陸の広大な地域で現在使用されている印欧諸語は、紀元前4000年頃と推定される単一の印欧祖語から分岐して成立した。基本語順については、西側のアイルランド語ではVSO、東側のシンハラ語ではSOVである。印欧祖語は基本的にSOVに近いタイプであったと考えられるが、この立場に立つと西側のアイルランド語は典型的な主要部前置型、東側のシンハラ語は典型的な主要部後置型に移行したことになる。

この発表では、印欧祖語の基本語順がSOVであったことを支持する根拠をゲルマン語の立場から指摘するとともに、西側の諸言語に起こったOVからVOへの推移を、言語内の要因に基づいて説明することを試みる。

4. まとめ

昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの世界的蔓延のために、海外で予定していたフィールドワー

クや学会発表は実現できず、ことばの科学研究センターの活動は国内にとどまった。しかしながら、国内での研究活動は活発に行った。研究センター員は昨年度にくらべて1名増え、7回開催した研究会ではことばをめぐるさまざまな問題について忌憚のない意見交換がなされた。またセンターの活動内容を発信するために、あらたにセンターホームページを立ち上げた。ホームページおよびPOSTにおいて研究会の開催案内が広報されるようになったために、昨年度よりも多くの教員・大学院生が研究会に参加するようになった。今年度の研究成果は、以下に示されているように、11編の研究論文が公刊され、13件の研究発表が行われた。来年度はコロナ禍が一段落し、国外での活動も可能になることを大いに期待したい。記述と文献による言語の総合的研究を目指す本研究センターとしては、本センターの活動を一層活発化させ、本学における教育・研究に寄与していきたい。

5. 研究成果

(1) 著書

(2) 学術論文

1. 梶茂樹 2021 「スワヒリ語の ndiyo 「はい」 の由来に関するニョロ語からの考察」『アフリカ研究』99: 13-19. 査読有
2. Kaji, Shigeki 2021 "African Communication: Sounds, Humans, and Visual Objects" *Gengo Kenkyu Anthology* 1: 41-68. 査読無
3. Kaji, Shigeki 2022 "Taboo Expressions in the Nyoro Language: Descriptions and Analyses". *Working Papers in Bantu Languages* 1: 69-105. 査読無
4. 梶 茂樹 2022 「異なる言語を話す人が1つのコミュニケーションの場を形成する時どのような言語的手段があるかについての類型論的考察—特にアフリカの事情に注目して—」『京都産業大学論集・人文科学系列』55: 257-273. 査読有
5. Kitajo, Mitsushi 2021. «Колѣбание в употреблении деепричастий совершенного вида в русских литературных произведениях XVIII – XIX веков». *The American scholarly journal Cross-Cultural Studies: Education and Science (CC&ES)* Vol.6, Issue 2, p p .14-27. 査読有
6. Bertyakova A.N., Kitajo, Mitsushi. 2022. «Релятивная единица в межкультурном пространстве». Монографии "Contemporary Trends in Intercultural communication and Didactics". University of Warsaw. pp.49-61. 査読有
7. 島憲男 2021 「ドイツ語の文法的構文ネットワーク：結果構文と構文研究」 京都産業大学 総合学術研究所所報 (16), 25-48頁. 査読無
8. 吉田和彦 2021 「ヒッタイト語における不規則な3人称複数過去語尾 -ar」『西南アジア研究』93: 44-67. 査読有
9. 吉田和彦 2021 「ヒッタイト語の小辞 -qa (r) の歴史言語学的考察」日本オリエント学会『オリエント』64-2: 133-145. 査読有
10. Yoshida, Kazuhiko 2021. "The Hittite 3 pl. Preterites in -ar Revisited." *Lyuke wmer ra. Indo-European Studies in Honor of Georges-Jean Pinault*, eds. by Hannes A. Fellner, Melanie Malzahn, and Michaël Peyrot. Ann Arbor: Beech Stave Press. 538-545. 査読有

11. Yoshida, Kazuhiko 2022. "Some Diachronic Remarks on the Hittite enclitic particle *-ya(r)*" *Ha! Linguistic Studies in Honor of Mark R. Hale*, eds. by Laura Grestenberger, Charles Reiss, Hannes A. Fellner & Gabriel Z. Pantillon. Wiesbaden: Reichert. 413-422. 査読有

(3) 研究発表

1. 梶 茂樹「アフリカ人の名前」ことばの科学研究センター 令和3年度第1回研究会。2020年7月22日。京都産業大学。
2. 梶 茂樹「異なる言語を話す人が1つのコミュニケーションの場を形成する時どのような言語的手段があるかについての類型論的考察—特にウガンダ西部の事情に注目して—」多言語混在状況を前提としたアフリカ記述言語学の新展開。2021年7月17日。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
3. 梶 茂樹「ことわざで自己表現するアフリカ女性」アカデミー・サロン「世界のことわざに”読む”人と人とのつながり：女性たちの挑戦の軌跡（16～21世紀）」2021年11月6日。六本木ヒルズ森タワー。
4. Kaji, Shigeki 2022 "Understanding taboo expressions through logical analyses: The case of Nyoro" Establishment of a Research Network for Exploring the Linguistic Diversity and Linguistic Dynamism in Africa (ReNeLDA) conference. February 11, 2022, Zoom
5. 加野まきみ「海を渡った日本語—コーパスで探ることばの変化—」ことばの科学研究センター令和3年度第2回研究会。2021年7月28日。京都産業大学。
6. 加野まきみ“Key Concepts in Corpus Linguistics as a Research Tool” 外国語学部 研究交流会。2021年9月2日。京都産業大学。
7. Kano, Makimi "Revealing the characteristics of reading materials for university students using a corpus linguistics approach" JALT Kyoto Annual General Meeting. 2021年11月6日。オンライン。
8. 北上光志「テキスト言語学の観点からのロシア語動詞と副動詞のアスペクトに関する通時の研究～19世紀から20世紀の文学作品を資料として～」ことばの科学研究センター 2021年度 第4回研究会。2021年10月2日。京都産業大学。
9. 島憲男「宮沢賢治のドイツ語訳テキストに生起するドイツ語構文の機能的役割：結果構文と同族目的語構文を中心に」京都ドイツ語学研究会第104回例会。2021年9月18日。オンライン。
10. 島憲男「構文の機能的役割：宮沢賢治のドイツ語訳テキストを手掛かりに」ことばの科学研究センター第5回研究会。2021年11月24日。
11. 森博達「『日本書紀』区分論と聖徳太子」ことばの科学研究センター令和3年度第3回研究会。京都産業大学。2021年9月29日。
12. Yoshida, Kazuhiko "Some Diachronic Remarks on the Hittite enclitic particle *-uar*." The 40th East Coast Indo-European Conference. 2021年6月18-20日。コーネル大学/ヴァージニア工科大学（オンライン）。
13. 吉田和彦「印欧祖語に再建される基本語順およびゲルマン語に生じた語順変化」ことばの科学研究センター令和3年度第7回研究会。2022年1月17日。京都産業大学。
14. 鈴木孝明「束縛現象に関する言語知識とその習得プロセス：日本語を母語とする初級英語学習者の場合」ことばの科学研究センター 令和3年度第6回研究会。2021年12月22日。京都産業大学。

(4) その他

1. Horie, Kaoru, Suzuki, Takaaki, & Suzuki, Wataru. 2021. *Studies in Language Sciences* 19 (1).
2. Horie, Kaoru, Suzuki, Takaaki, & Suzuki, Wataru. 2021. *Studies in Language Sciences* 19 (2).

Center for Language Studies: Annual Report of Research Activities 2021-2022

Kazuhiko YOSHIDA
Shigeki KAJI
Makimi KANO
Mitsushi KITAJO
Norio SHIMA
Takaaki SUZUKI
Hiromichi MORI

Abstract

The Center for Language Studies was established as one of the research centers in the Institute of Comprehensive Academic Research of Kyoto Sangyo University in 2020. The center makes efforts to comprehensive research of languages of the world from both a synchronic and diachronic perspectives. Of special relevance to our research activities are mechanism of language change, field linguistics, syntactic and semantic properties of verbs, text linguistics, language acquisition of children, and language contact. During the academic year 2021-2022 we had productive discussions towards the progress of our research by holding seven workshops.

Keywords : descriptive linguistics, comparative linguistics, syntax, text linguistics, psycholinguistics, language contact, history of cultural negotiations.

